岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター報
第 4 号

編集・発行

〒700
岡山市津島中3丁目2番1号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
☎(0862)52－1111　内線 246
1990年7月　発行

のぞいてみた井戸の世界

蛇口をひねれば、それだけで必要な飲料水を手に入れることができる現代。そんな生活をわたしたちは便利とさえ感じなくなってしまった。こんな現代世界を、この写真の井戸を使っていた鹿田遺跡の人たちは、きっと羨望のまなざしで見ているに違いなかろう。人間のみならず、生物が生きていくうえで水は欠くべからざるものである。そして、人が農耕を始め、定住生活を営み、都市を形成するようになると、水の確保はますますその重要性を増してきた。溝を穿ち、各種の水利施設によって新たな水源が開発され、これが、進出できなかった未開原野の開墾を可能にした。さらに、井戸による地下水の利用は集落・都市での人々の生活を容易にした。こうした人と水との関係、中でも井戸と人々の生活の関係は、飲食・調理のみならず、信仰・宗教といった日常のくらしの中でも、より高次な精神文化との深いかかわりを認めることができる。今や集落を発掘すれば、井戸の存在は当然といった感がある。しかしながら、その形状や埋置・遺棄された遺物には、さまざまな態を観てとれる。今回は、そんな井戸底に広がる世界を繙いていくことにしよう。

井戸の歴史は古い。エジプトでは、ナイル川流域から離れた地域を往来する商人や軍隊のために盛んに井戸が掘られ、インダス文明には、すでに煉瓦積

の井戸が造られていたことが、モヘンジョ・ダロ遺跡等の発掘で明らかとなっている。中国においても、浙江省河姆渡（フームートゥ）遺跡第２層（約5700年前）に覆屋（おおいや）をもつ木組井戸が、漢代の画象石（石の表面に画象を彫りこんだもの）や明器（めいき）（墓に副葬するために製作された器物）に、はねつるべをもつ井戸が描かれたり、井桁（いげた）をもつ井戸の模型が作られたりしている。

日本では、確実な井戸の検出は弥生時代前期にさかのぼる。富山大学の宇野隆夫さんらの研究によると、井戸の型式変化には素掘り井戸が主体をなし、木組のものも認められる弥生～古墳時代、木組井戸が主体の古代、石組井戸が主体の中世、それに土製品組井戸が加わる近世・近代の４時期が認められるという。

岡山県下で最も古い井戸は弥生時代中期前半にもとめることができる。その数は弥生時代後期中頃から増加し、古墳時代初頭にかけてその数は170余に達する。医・歯学部が位置する鹿田遺跡でも当該時期の井戸は23基が検出されている。そのほとんどはやはり素掘り井戸である。また、この時期の井戸の底部には、完形の土器が出土する場合が多い。おそらく井戸が廃棄されるに及んで、“水”の再生を願う祭祀に使用されたのであろう。この意図的に井戸底部に残された土器にも、時期的な変遷をたどると興味深い現象をみることができる。つまり、弥生時代中～後期には、残された土器は壺、甕、高杯（たかつき）、鉢など多器種で構成され、量的にみても少なくない（写真２）。ところが弥生時代後期終末～古墳時代初頭には圧倒的に甕が主体となるものの、それらは日常的に使用されているもので、その量も１個ないし数個と、前時期と比較しても小規模なものとなる。このことは、数軒の住居址に１基の井戸という対応関係をもつ弥生時代後期から、住居址１軒にそれぞれ占有的な井戸が付帯する傾向がみられる古墳時代初頭にかけて、井戸祭祀のありかたが、集団的なものから個別的なものへと変化していった結果ではないかと岡山県教育委員会の中野雅美さんは指摘する。

写真２　鹿田遺跡　井戸４
弥生時代後期後半

写真３　鹿田遺跡　井戸２（管理棟）
12世紀前半

写真４　鹿田遺跡　井戸22から出土した馬骨の一部

写真５　鹿田遺跡　井戸20から出土した斎串

古代の頃には、木組井戸が主体となり、その形態も多種にわたる。表紙写真の鹿田遺跡出土の丸太を刳り貫いた、組合わせ式の井戸側もこの頃のものだ。また、井戸側だけでなく、井戸祭祀もこの時期には大きな様変わりをみせる。斎串（いぐし）（まじない札、写真５）などが鹿田遺跡井戸20や滋賀県鴨遺跡等から出土している。

中世には、畿内では石組井戸が中心となるが、西日本ではなお木組の井戸が主流であり、古代以来の伝統上にその技術を発達させたようだ（写真３）。井戸祭祀もさらに多様化する。鹿田遺跡井戸22（11世紀末～12世紀前半）からはほぼ１頭分の馬骨が出土している（写真４）。馬は水神の好物といわれることから、古代より“水”にかかわる祭祀には土馬（馬を模倣した小型の土製品）などが盛んに使われていたが、そのような信仰が、引き続き受け継がれていたことを示している。また、広島県草戸千軒遺跡Ｃ２区第４号井戸には、中央に長さ約60cmほどの節が抜かれた竹が底面近くまで達する状態で立てられていた。奈良大学の水野正好さんらは、こういったものに陰陽道等の影響が認められることを指摘している。

井戸は時間の流れとともにさまざまな型式が生み出され、その閉ざされた空間の中には、今ではわたしたちが見ることのできない当時の人々の精神世界を垣間見ることができる。“あさがおにつるべとられてもらひみず　千代女”こんな風情が遠い昔のことに感じられるわたしたちには、井のなかの蛙よりまだまだ知らないことがありそうだ。

鹿田遺跡の井戸

山本　悦世

構内遺跡の中で鹿田地区（鹿田遺跡）では数多くの井戸が検出されている。こうした井戸からは，当時の社会的背景の一端を窺うことができると同時に，時として，思いもかけないような特異な状況や遺物を見せられることがある。

弥生時代中期後半　鹿田地区で最古の井戸（外来診療棟の調査）はこうした特異な土層を見せた好例である。通常，井戸は下半に青い粘土，上半に黒い炭化物が堆積する例が多い。ところが，この井戸では赤色を呈するベンガラが数層にわたって確認された。当時，ベンガラは貴重なもので，祭祀用土器の色付けや墓に死者を葬る際の祭り等に使用されていた。また，下層には雑草メロンを入れたと考えられる籠の存在が推定された。井戸の下層に籠を入れ，その上をベンガラ・粘土・炭化物を含んだ砂などを数回にわたって散布し，粘土を敷き詰めた後，上部に多量の炭を埋める。こうした祭祀は非常に珍しいもので，一般的ではないが，井戸の下層に供物（モモ・シジミ等）を入れ，粘土で埋め，炭で覆うスタイルは基本的なパターンとして存在するようである。

弥生時代後期　弥生時代の井戸は素掘りが主流であるが，外来診療棟の調査では刳り貫き材を組合せた井戸側が遺存する井戸が検出されている。周辺地域は上東遺跡で井戸下半の壁に矢板を打ちこんだ報告が数例ある程度であり，その技術には注目される。また，井戸の上部に多量の炭を伴って多数の土器を入れるという一つの典型的なパターンも認められる。特に，壺・高杯・鉢が中心をなす。壺については井戸の底部に完形で納める例もある（写真６）。

弥生時代終末期～古墳時代初頭　終末期に入ると，こうした状況に変化が現れてくる。大きな変化は，井戸の数の増加と，吉備地方に特有の甕が，ほぼ完形の状態で井戸の底に近い位置に置かれるという器種の変化・出土位置の変化である。甕はいずれも全面に煤の付着や煮こぼれ痕が認められたり，内面に焦げつきがあり，日常品と判断される。この段階では，依然として，上部に遺物を入れる古いスタイルが残り，過渡的様相を示すが，古墳時代初頭に入るとこれも消失し，底部近くに甕を置くというパターンが完成する。この井戸祭祀の変化は弥生から古墳時代への社会的変化を暗示している。甕以外では，表面に人面が描かれた高杯や櫂状木製品，そして，美しいレリーフの表面に黒漆が塗られた短甲状木製品（写真７）等も類例の少ない遺物として挙げられる。

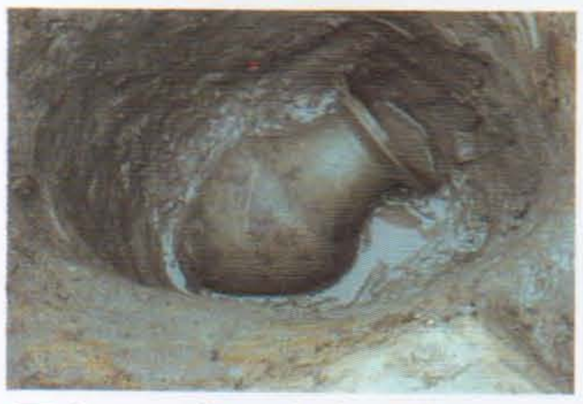

写真６　鹿田遺跡　井戸４
壺出土状況

写真７　鹿田遺跡　井戸15
出土の短甲状木製品

古代（平安時代）　古代の井戸は鹿田地区では非常に大形の刳り貫き材を組合わせた井戸側を有す（表紙写真）。出土遺物も，一般的なものとはやや様相を異にし，墨書土器（「田」「専」「玉」等と書かれた土器），転用硯（須恵器の蓋を転用した硯），木簡（薄い木札に墨書したもの）等，役所的な香りのする遺物が目につく。また，井戸の底部からは斎串・横櫛・曲物・刀子・尖棒が出土しており，従来とは異なる性格の「まじない」の存在を予想させる。

古代末～中世（11世紀後半～14世紀）　鹿田地区では，木組の枠を持つ２例以外はすべて素掘りの井戸である。管理棟の調査では，遺存の非常に良好な井戸枠を有す井戸が検出された（写真３）。内部には四隅に小皿が立てた状態で差し込まれ，井戸底近くには牛の頭骨が１個据えられていた。この井戸以外にも，井戸の上部に馬骨を納めているものがあり，牛馬を供える祭祀が一般に存在したと考えられる。

12世紀以降は，井戸の底に完形の椀１点ないし数点と曲物を納める例が主流となり，祭祀において中心となる器種が皿から椀へ変化する様子が窺われる。また，他に多量の稲籾・稲藁が認められたり，下駄・杓子・漆塗の椀等の木器が出土するなど，生活感溢れる遺物が姿を見せている。

以上のように，井戸祭祀は多様な形でその時々の社会的変化を描き出す。それを読み取ることによって，弥生時代から古墳時代への社会体制の変化や，古代における鹿田遺跡の性格などを窺い知ることができる。今後も，こうした井戸によって，様々な過去からのメッセージを受けたいものである。

（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手）

◇◇◇◇最近の調査から◇◇◇◇

岡山大学では、最近の調査活動として、発掘調査２件、試掘調査２件、さらに半田山演習林における半田山城の測量調査を行ないました。発掘調査は、教育学部エレベーター新設工事、大学院自然科学研究科棟共同溝・検水槽設営に伴うもので、いずれも小規模な調査でしたが、前者においては、縄文時代後期～晩期にかけてのピット状遺構を、後者の調査では古墳時代後期～古代にかけての溝２条を検出することができました。両者とも、層位観察から微高地部に位置しており、このような場所にはかなりの密度で遺構が集中しているようです。また、附属図書館新営に伴う試掘調査でも、弥生時代、古墳時代後期、古代～中世と各時期の溝を検出しています。大学構内津島地区全体をみても良好な状態で遺跡群が残されているようです。このほかに、従来から分布調査等を行なってきた半田山演習林において、半田山城の測量調査を実施しました。半田山城は、東西方向に展開する連郭式山城で、西に烏山、直下には都月坂をのぞむ、半田山山塊の西寄り山頂（標高136ｍ）に立地しています。城の東西長は約140ｍ、南北幅は約70ｍ以上あり、山頂をとりこむ形で主郭を置き、東西方向に延びる尾根上に各郭を配置しています。堀切、土塁などは認められませんでしたが、竪堀３条を北斜面2ヵ所、南東斜面1ヵ所で確認しました。この半田山城は、城主が「林玄蕃」という人物であったことが漠然と伝えられているだけで、その他の歴史的事実については、なお不明の部分が多いようです。今回のこの測量調査によって、半田山城に関する基礎資料を得ることができました。今後は、この資料をもとに、文献資料での諸成果を鑑みつつ、その編年的位置づけ、歴史的考察を進めていきたいと考えています。

常設展示室いよいよオープン!!

これまで、埋蔵文化財調査研究センターでは「岡山大学キャンパス発掘成果展」や「野外考古学体験教室」等、発掘調査や研究成果の公開とセンターの活動を理解していただくために、諸々の普及活動を行なってきましたが、この３月に完成した収蔵庫（写真８）の２階の一室に、念願の常設展示室（写真９）を開設しました。展示スペースは、約20m²です。これまで岡山大学の鹿田地区、津島地区などで行なわれてきた発掘調査の概要が一目で理解できるように、縄文時代から中世にかけての主要な出土遺物とその出土状況のパネルを展示しています。また、現在展示されている資料だけでなく、これからの発掘調査でも得られる成果等をあわせて、特別展や速報展も企画していきたいと考えています。展示室の見学は、職員の勤務時間中ならいつでも結構ですが、あらかじめご連絡していただければ幸いです。是非お誘い合わせのうえ、ご来室ください。

連絡先：(0862)52-1111(内線246)

↑写真８

↓写真９

表紙写真説明　鹿田遺跡（附属病院外来棟）より出土した井戸側。径１ｍ以上もの大木（スギ）を刳り貫いた組合せ式のものである。長約240cm×幅約100cm×厚約11cm。底部からは須恵器をはじめ、櫛・曲物・斎串などの多量の木製品が出土した。８世紀後半～９世紀初頭頃に使用されていたようだ。

編集後記　今回は、鹿田遺跡で見つかった「井戸」を中心に特集を組んでみました。近頃は、田舎に行っても井戸なんて見かけなくなりました。名実ともに“過去の遺物”になってしまったんでしょうか？　水道がこれだけ普及した我々の社会も、“水と人”の歴史の中では一つの画期に位置しているのかも知れません。井戸端会議もこれくらいにして、仕事、仕事！　（絹）